

北陸地方における明治時代のニホンジカの生息状況\*

南部 久男

富山市科学文化センター

〒939-8084 富山市西中野 1-8-31

石坂 雅昭

文部科学省防災科学技術研究所長岡雪氷防災実験所

〒940-0821 長岡市栖吉町前山 187-16

**On inhabitation records of sika deer, *Cervus nippon*, of Meiji era in  
Hokuriku District, central Japan**

Hisao NAMBU

Toyama Science Museum

1-8-31, Nishinakano-machi, Toyama-shi, 939-8084 JAPAN

Masaaki ISHIZAKA

Nagaoka Institute of Snow and Ice Studies

National Research Institute for Earth Science and Disaster Prevention

187-16 Suyoshi, Maeyamamachi, Nagaoka-shi, 940-8021 JAPAN

We made thorough examination of inhabitation records of sika deer, *Cervus nippon*, by several old documents in Hokuriku District in the Meiji era. In Noto peninsula of Ishikawa prefecture in Meiji era, huntings of sika deer were carried out in winter. During 11 years from 1888 to 1897, the skin of sika deer of a total of number of 4253 was produced in Ishikawa prefecture and during 15 years from 1886 to 1910, those of 935 in Toyama prefecture. The mesh climatic data (Japan Meteorological Agency) based on the meteorological data from 1955 to 1985 indicate that snowy areas where maximum snow depth are less than 50 cm, the deepest limit of sika deer's living, lie in Noto peninsula of Ishikawa prefecture and western Toyama prefecture. It seems that sika deer inhabited in those areas in Meiji era. In most areas in both Ishikawa and Toyama Prefectures, it seems that sika deer became extinct until the end of Taisho era. One of the important factors of extermination of sika deer in Ishikawa and Toyama Prefectures are considered to be huntings in winters.

**Key words:** Sika deer, Hokuriku District, Meiji era, Snow cover, Mesh climatic data file

石川県統計書, 富山県統計書, 民俗関係の文献等を調査し, 明治から大正時代の北陸地方のニホンジカの生息状況を調べた。石川県統計書, 民俗関係の文献より, 石川県能登半島では冬期に鹿狩が行われ, 両県の統計書等より, 鹿皮が石川県能登地方等で, 1888-1897年の11年間に計4253枚が, 富山県で1886-1910年の15年間に計935枚が生産されていたことが明かとなった。1955~1985年の気象観測点の気候値に基づき作成されたメッシュ統計値(旧メッシュ気候値)より, 冬期にシカが生息できる最大積



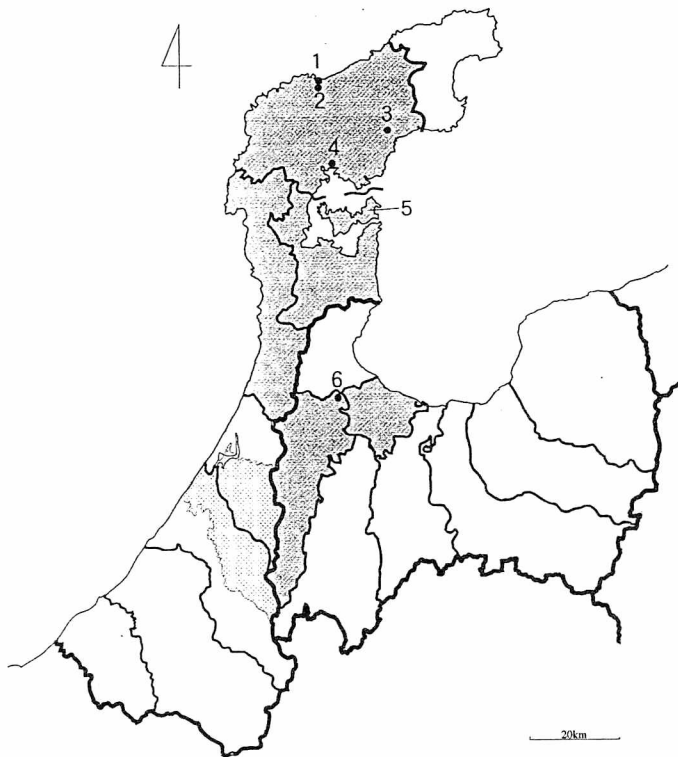


図2 明治時代に鹿皮が生産された郡市。

金沢市（薄い黒の部分）は、現在の市町村界とした。図中の数字は、表2に示した鹿が記録された地点 1. 輪島崎町（現在の輪島市輪島崎町）2. 鳳至郡大屋村字小伊勢（現在の輪島市小伊勢？）3. 組倉（現在の能都町組倉）4. 鳳至郡住吉村字仲居（現在の穴水町中居住吉？）5. 能登島 6. 高岡市勝木原・西広谷

石川県では、1888～1898年の11年間で計4253枚の鹿皮の生産が見られた（年毎の最小8枚、最大1673枚）。1888年には1673枚と最も多く、1889年～1894年にかけては、157～742枚と100枚を越すが、1895年～1898年にかけては、50枚以下となっている。地域別では、金沢市が1418枚、次いで鳳至郡が1305枚である。金沢市の統計は、1888年、1893年、1894年（明治21年、26年、27年）の3年間だけであるが、鹿島郡ではほぼ毎年生産され、石川県全体で少なくなった1895年～1898年の生産はほとんど鹿島郡である。

金沢市で鹿皮が生産されたのは3年だけであり、しかも数量が極めて多いため、鹿皮が生産された郡と比較すると不自然である。川端（1982）は、古老からの聞き取りにより、1894年頃に能登島で300頭とも400頭もいわれる鹿が捕獲され、七尾市に運ばれたと述べている。これは、聞き取り調査であることから、運ばれた年や数が不正確で幅があると仮定すると、1893年、1894年に金沢市で生産された鹿皮は、1894年頃能登島で捕獲された鹿が金沢市で製革された可能性があると思われる。

富山県では、1886～1910年の15年間に、計935枚（年毎の最小25枚、最大173枚）が生産されていた。1886～1890年に県全体で25～60枚、1893年に県全体で120枚、1901～1910年にかけて合計30～173枚が、西砺波郡（現高岡市西部、福岡町、小矢部市、福光町）と射水郡（現高岡市、新湊市、大島町、小杉町）で生産さ

表2 明治、大正時代の鹿狩り等の記録

県	時代	鹿の記述概要	引用*	図2**
石川県	明治	1877年（明治10年）に組倉（現在の能都町組倉）の「井平」で75匹の鹿を捕殺。	1	3
		1884年（明治17年）以前の正月20日頃、鳳至郡大屋村字小伊勢（現在の輪島市小伊勢？）で、雪が降り積もり表面が凍っているときに鹿狩りを行った。30名位で山を囲み、上からわめきちらし鹿を追い出し、凍った雪の上を滑り落ちて逃げてくる鹿を待機している人が捕まえる。2頭捕し、皮は売り、肉は食べた。1950年（昭和25年）の古老からの聞き取り。	2	2
		1887年頃（明治20年頃）、鳳至郡住吉村字仲居（現在の穴水町中居住吉？）では鹿狩のことをシシガリと言った。シシガリは、雪がたくさんつもった冬の日に行い、村人が瑞鳳山からシシヤリ、棒を持って囲みながら海岸の方へ追い込む。海上に待機している漁師が、山から海へ飛び込んだ鹿をシシヤリで突き殺す。逃げた鹿は能登島まで泳いでいったものがいた。肉はスキヤキにして食べ、皮は売った。1950年（昭和25年）の古老からの聞き取。	2	4
		1894年頃（明治27年）からクマザサが枯れはじめ、雪量が増え、かろうじて能登に渡りついたシカも、海岸近くに迷い出て捕殺された。七尾市在住の古老によれば、この年、能登島では、軍隊が出動し、行き暮れたシカ300頭とも400頭ともいわれる数を射殺し、府中（現在の七尾市本府中？）の波止場へ水揚げして大八車数台に山積みし、市中を運んだ。	3	5
		鹿は主に能登地方で農作物に被害をあたえ、これを駆除するため冬期に鹿狩りすもの多く鹿皮の産額が上がっている。降雪の多少等により産額に変動がある。	4	
		1920年（大正9年）9月13日、輪島崎町（現在の輪島市輪島崎町）観音寺山で奥能登最後と思われるシカ捕獲。	5	1
		1923年（大正12年）に組倉（現在の能都町組倉）の大石山で狩人が能都町最後と判断される3匹の鹿を射殺。	6	
	大正	シカとイノシシは大正初期に絶滅した。	7	
		鹿は大正初期まで沢山いて、鹿渡島より能登島へ群をなして渡るのを見た人がある。	8	
		明治1877年頃（明治10年）、高岡市勝木原・西広谷では、シカが田畑に農作物を食べにきた。正確な年は不明だが明治23～25年の1月15日一晩に降った大雪で山から広谷川に降りた鹿を地域の人たちが捕まえ、この地域のシカは絶えた。アンケート調査による。	9	6
富山県	明治	明治の初年に嫁いできた祖母が裏山で獲れた鹿の肉を食べたと聞いた。鹿は日露戦争以前には獲ったが、それ以後とったことはないし、とった話も聞かないと狸捕りより聞いた。	10	

\*引用：1（岩田，1980）、2（四柳，1953）、3（川端，1982）4（石川県，1891）、5（岩田，1973）、6（岩田，1980）、7（福井他，1976）、8（福井，1976）、9（南部，1999b）、10（湊，1965）

\*\*図2：数字は図2の番号に対応する。

れている。射水郡では1901年だけの生産である。西砺波郡ではほぼ毎年生産されているが、1908～1910年にかけては少なくなり、30枚ほどになっている。

## 2. 鹿狩の記録

鹿狩の記録はいくつか発見された（表2）。

石川県では、明治22年石川県勸業年報（石川県、1891）に、牛皮、馬皮、鹿皮の生産統計と製革の記述が見られ、それによると、耕作物の被害を防ぐため冬期に鹿狩が行われ、統計に上がっている鹿は当該地方で駆除された鹿であるとの記述内容であり、統計に挙がっている鹿皮の由来は、生産された地域もしくは周辺で捕獲されたものであることが分かる。四柳（1953）は聞き取り調査により、1887年頃（明治20年頃）には冬期の積雪期に、鳳至郡住吉村字仲居（現在の穴水町中居住吉？）において、山から海岸へ鹿を追出す鹿狩りが行われていたと述べ、また、鳳至郡大屋村字小伊勢（現在の輪島市小伊勢？）においても、1884年以前（明治17年）には、正月20日頃の積雪期に山から鹿を追出し捕獲したことを述べている。

富山県では、鹿狩りの記録は少ないが、高岡市勝木原・西広谷では、明治10年頃には畑や田にシカが農作物を食べにくることや、正確な年は不明だが明治23～25年の1月15日には、雪のために谷に集まった鹿が捕獲され、一帯の鹿が絶滅したことがアンケート調査で判明している（南部、1999b）。また、氷見市では鹿狩りに使用したと思われるシシヤリが残っている（南部、1999c）。

## 3. シカの分布と積雪深との関係

現在のシカの分布は積雪深50cm以下の地域に限定されていることが示唆されている（高橋、1992）。現

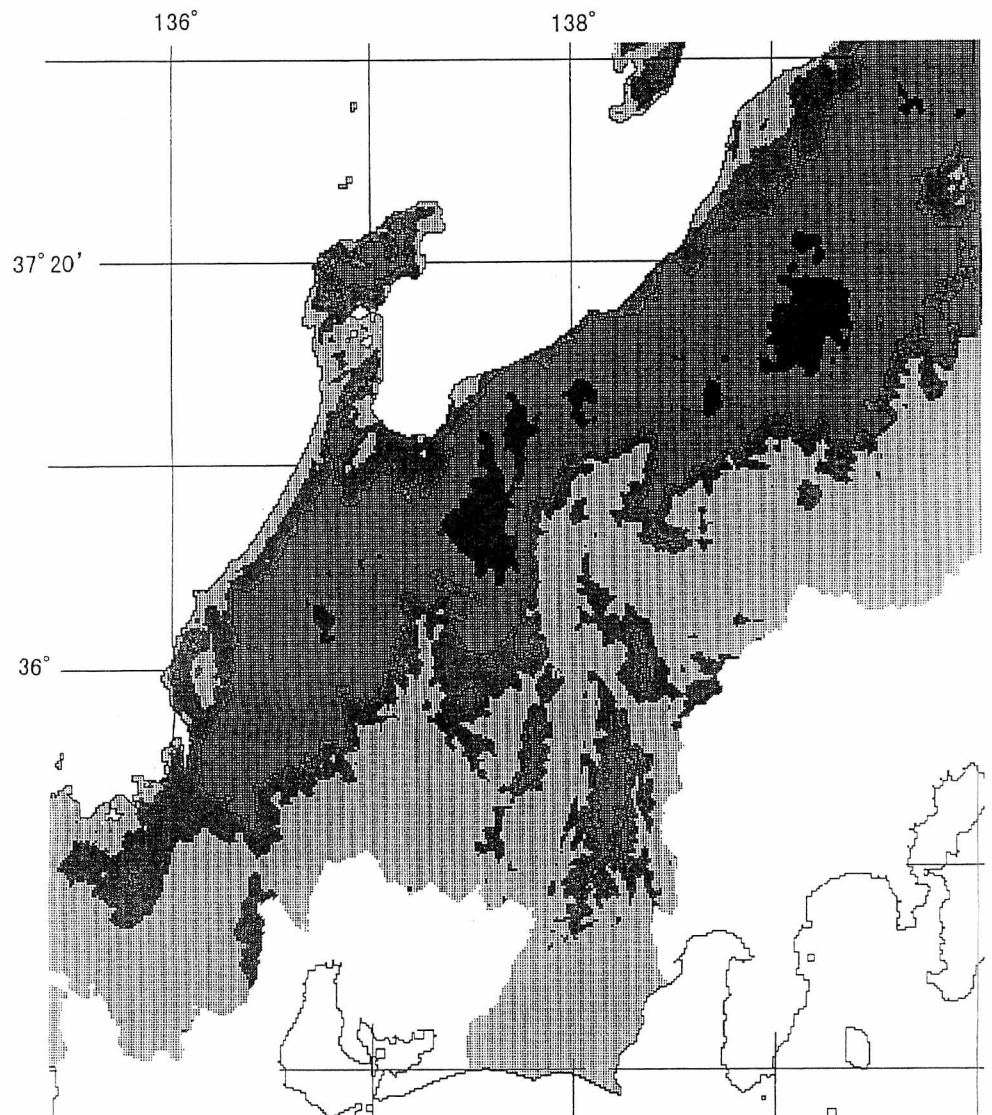


図3 最深積雪深（詳細は本文参照）

白、調査対象外；薄い部分、1～50cm；中程度の濃さ、51～100cm；やや濃い、101cm～300cm；黒、301cm以上

在北陸地方でシカが冬期に生息できる地域の積雪深の目安として、最深積雪深を図3に示す。これは、積雪分布としてメッシュ統計値（気象庁、1996）の最深積雪統計値を用いたものである。すなわち、1955～1984年の30年間の観測点の気候値をもとに未観測点の気候値を地形的な特徴から統計的に推定することによって、日本の積雪地域の積雪分布を1キロメッシュの単位で求めたものである（気象庁、1989）。標高の高い所や複雑な起伏を持つ地形のところを除くと積雪分布の特徴をよく表し、現状では未観測点気候地に関する均一で一定のレベルの精度を持つデータと言える。図3は、この統計値から得られる1月と2月の月最深積雪深のうち大きい方について、積雪深の区分に応じた分布を求めたものである。

最大積雪深50cm以下の地域は石川県では、能登半



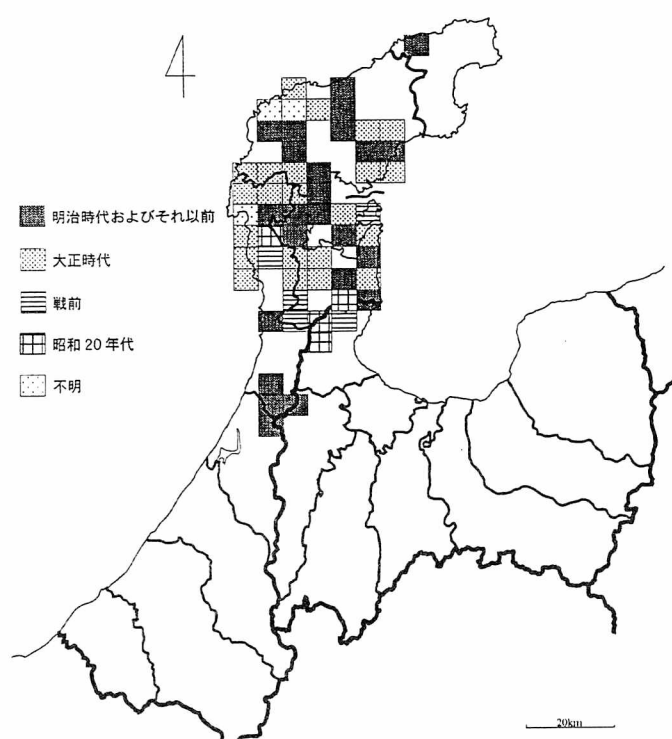


図4 石川県のシカの絶滅年代  
(石川県, 1979より作図)

島先端部（現在の珠洲市）の海岸周辺、七尾市と鹿島郡のほぼ全域、羽咋市から福井県境にかけての海岸周辺である。福井県では、北部の一部と南部の若狭地方であり、北部は石川県境との海岸部分と福井平野（福井市）、若狭地方では三浜町から小浜市、大飯郡にかけての海岸部分である。富山県では、西部と東部の海岸付近で50cm以下の地域が見られる。西部では、氷見市の海岸付近、高岡市西部と福岡町東部、東部では、黒部川扇状地である。北陸地方で現在シカが年中見られる地域、すなわち冬期も生息している地域は福井県の若狭地方だけであり（環境庁, 1988）、図3の福井県の積雪深50cm以下の地域とよく一致する。

氷見市に近い高岡市伏木と石川県金沢市の最深積雪の1881年（明治24年）から1981年（昭和56年）の90年間の年変動より、明治時代の積雪深は大正、昭和とさほど変わらないことが知られている（富山地学会編, 1982）。1891年（明治24年）だけは大雪で、伏木では2m近く、金沢は1.3mほどであったが、その後の20年間は、両地点の多くの年で20cm～80cmであった。このことから、石川県、富山県の比較的標高の低い地域の積雪深は、明治、大正、昭和にかけさほど違いがなかったと推測される。そのため、明治時代にも図4に示すような50cm以下の地域が同じような地域でみられたと推測される。

このように、明治時代の石川県能登半島や富山県西部では、シカが冬期に生息できる積雪深50cm以下の地域があったと思われる、1、2で述べたようにこれらの地域で鹿皮が生産されたことや、冬期に鹿狩が行われたことから、これらの地域では冬期にシカが生息していたと考えられる。また、農作物への被害があることより、非積雪期にも生息していたと思われる、1年中生息していた可能性がある。

#### 4. 明治～大正時代にかけての鹿の生息状況

上述のように、統計書の毛皮が生産された地域は、石川県の能登半島と金沢市、石川県と隣接する富山県の西部であり、特に石川県の能登半島で多く生産されていたことが明かとなった。石川県能登半島では明治中頃、富山県西部では明治後半には鹿が確実に生息していたと思われる。

大正年間にかけては毛皮の統計は確認できなかった。1920年（大正9年）には輪島市で、1923年（大正12年）には、能都町で鹿が捕獲され（表2）、これらの鹿は能登半島最後の鹿であると述べられている（岩田, 1973, 1981）。1923年（大正12年）からは狩猟統計があるが、1923～1960年のオスシカの捕獲数は、富山県では1923年（大正12年）2頭、1924年（大正13年）2頭、1959年（昭和34年）1頭、石川県では、1930年（昭和5年）4頭に過ぎず、ほとんど統計に上がっていない（林野庁, 1963）。石川県の鹿の生息に関するアンケート調査では、鳳至郡、鹿島郡、羽咋郡の多くの地域では明治から大正時代に絶滅し、地域によっては、昭和20年代に絶滅したとされている（石川県, 1979；図4）。

狩猟統計やアンケート調査から、大正時代後半には、石川県、富山県の鹿が生息していた多くの地域で鹿はいなくなったと考えられる。

石川県でのシカの絶滅の原因は、捕りつくし、自然環境の変化、大雪などの個々の原因が複合的に作用したものと指摘されている（石川県, 1978）。今回の調査結果より、石川県、富山県のシカの絶滅の原因の一つは、冬期の積雪期における狩猟であると推測される。

#### 摘要

1) 石川県統計書、富山県統計書、民俗関係の文献等を調査し、明治から大正時代の鹿の生息状況を調べた。  
2) 統計書等より、鹿皮が石川県では1888～1898年の11年間で計4253枚（年毎の最小8枚、最大1673枚）、富山県では1886～1910年の15年間で計935枚（年毎の最小25枚、最大173枚）が生産されていたことが明か

となった。

3) 明治時代の能登半島では、農作物の被害を防ぐための駆除目的の鹿狩が冬期に行われた(四柳, 1953)。

4) 1955~1985年の気象観測点の気候値に基づき作成されたメッシュ統計値(旧メッシュ気候値)より、冬期の最大積雪深50cm以下の地域が石川県能登半島や富山県西部にあり、明治時代にも冬期にニホンジカが生息できる地域があったと推測された。

5) 冬期の鹿狩、鹿皮の生産、最大積雪深50cm以下のシカが生息可能な地域があることなどより、明治時代の石川県能登半島、富山県西部には、冬期にシカが生息していたと考えられる。

6) 狩猟統計によれば、1923~1960年に石川県、富山県ともオスジカはほとんど捕獲されていない。

7) 大正時代後半までには、石川県、富山県の鹿が生息していた多くの地域で鹿が絶滅したと考えられる。

8) 石川県、富山県のシカの絶滅の主な原因は、冬期の積雪期における狩猟であると推測される。

#### 謝辞

文献についてご教示いただいた金子玲子氏、英文の校閲をしていただいた富山市科学文化センター布村昇館長、図の作成をしていただいた志波友子氏に深く感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 阿部永, 石井信夫, 金子之史, 前田喜四雄, 三浦慎悟, 米田政明, 1994. 日本の哺乳類. 東海大学出版会. pp.195.
- 福井時次郎, 1976. 哺乳類・爬虫類・両生類. 七尾市史第1巻資料編. pp.152-153.
- 福井時次郎他, 1976. 第二節哺乳類・爬虫類・両生類. 珠洲市史第1巻資料編. pp.277-281.
- 哺乳類分布調査科研グループ, 1979. カモシカ・シカ・ツキノワグマ・ニホンザル・イノシシの全国的生息分布ならびに被害分布. 生物科学31(2): 96-112.
- 石川県, 1979. 第2回自然環境保全基礎調査動物分布報告書(哺乳類). 42pp.
- 石川県, 1891. 製革. 明治22年石川県勸業年報. pp.107-109.
- 岩田秀男, 1973. 脊椎動物哺乳類. 輪島市史資料編第5巻自然環境資料. pp.316-322.
- 岩田秀男, 1980. 哺乳類・爬虫類・両生類. 能都町史. 261-268.
- 川端義信, 1982. 脊椎動物. 鹿島町史資料編(続)上巻. pp.213-248.
- 環境庁, 1988. 動植物分布調査報告書第3回自然環境保全基礎調査. 哺乳類. 227pp.
- 小林毛皮貿易株式会社, (発行年不明). 大正十年度における野獣の捕獲. 毛皮年報大正12年. pp.138-140.
- 高瀬重雄, 1994. 日本歴史地名体系16. 富山県の地名. 平凡社.
- 気象庁, 1996. 気象庁観測平年値 CD-ROM.
- 気象庁, 1989. 気象値メッシュファイル(積雪)作成調査について. 測候時報 56: 297-305.
- 湊晨, 1965. 能登半島の鹿. 氷見文学(14): 32.
- 南部久男, 1999a. 富山県で絶滅した大型動物(哺乳類・鳥類)の記録 I 明治・大正時代の富山県における哺乳類の毛皮及び狩猟等の統計. 富山市科学文化センター研究報告(22): 153-168.
- 南部久男, 1999b. 富山県で絶滅した大型動物(哺乳類・鳥類)の記録 II ナチュラリストからの報告. 富山市科学文化センター研究報告(22): 169-176.
- 南部久男, 1999c. 富山県で絶滅した大型動物(哺乳類・鳥類)の記録 III 博物館資料からの報告. 富山市科学文化センター研究報告(22): 177-187.
- 南部久男, 2001a. 石川県における明治時代の鹿・牛・馬の毛皮の統計. 富山市科学文化センター研究報告. (24): 103-107.
- 南部久男, 2001b. 大正10年度(1921年度)の日本の狩猟数. 富山市科学文化センター研究報告. (24): 97-98.
- 林野庁, 1963. 狩猟免許者の鳥獣捕獲の統計(1923~1960).
- 高橋成紀, 1992. 北に生きるシカたち シカ, ササそして雪をめぐる生態学. どうぶつ社.
- 高瀬重雄, 1994. 日本歴史地名体系16. 富山県の地名. 平凡社.
- 竹内隆熙編纂, 1893. 越中の生産. 小林恒太郎発行. pp.122.
- 富山県, 1979. 第2回自然環境保全基礎調査動物分布報告書(哺乳類). 42pp.
- 富山地学会編, 1982. 豪雪, 56豪雪と38豪雪. 古今書院.
- 若林喜三郎・高澤裕一, 1991. 日本歴史地名体系. 富山県の地名. 平凡社.
- 四柳喜孝, 1953. 鹿狩のはなし. 加能民俗. 2の4: 5-6.
- (加能民俗は、合本として下記に復刻されている。図書刊行会, 1983. 加能民俗. pp.241-242.)